【体育科教科提案】

新たな発見のある体育の学び

—子どもの「かわる可能性」に働きかける体育授業—

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 体育科でめざす子ども像

✍私は，4A リレーをして，リレーが前より好きになりました。自分の走っている所をビデオで見て「こんな所はこうしたら速くなるかな？これは，このままでいいかな。」といろいろなコツをつかみました。

最初は，何もルールを決めていなくて，とちゅうで人と人がぶつかったり，コースの内側に入って前の人をぬかしたり，いろんな問題が出てきました。そして，やっぱり「リレーをするためのルールが必要なんだな」とわかり，みんなでルールを決めました。走り終わった人は外へ出るという事や，相手をぬかす時は外側からまわってぬかすなどです。ゴーマークやバトンゾーンも決めました。ゴーマークは次の走者が走り出すための目印，バトンゾーンはバトンパスが終わるまで動けるはんいのことです。ゴーマークは毎回変わります。レースの結果をもとにして，走る順をチームで変えていくからです。4A リレーではレースをする時タイムをはかります。すると少しの差でもはっきりわかるようになります。

4A リレーは運動会リレーとくらべて楽しいです。みんなで決めるというのも最終レースまでにちがうチームとたくさん対戦したのも，運動会リレーとちがう楽しさだと思います。4A リレーはルールを決めるのに時間がかかるけれど，みんなで決めるのでルールをすなおに守れます。4A リレーは，リレーの楽しさ，おもしろさを教えてくれます。みんなでだんけつしてするので，とてもいい思い出になりました。（4 年女子児童）

彼女は，「ルールの必要性」「速くなるための技術」「レースの結果と作戦や練習との関連」そして「みんなでだんけつする」ことなどを学んでいる。また，**「4A リレーは，リレーの楽しさ，おもしろさを教えてくれます。」**と述べているように，教材で文化を学ぶという教科の本質にも気づいている。

本年度学校提案では，「学び」を，「学び手（自己）」と「学ぶ対象」と「ともに学ぶ仲間（他者）」の三者間における対話関係だと述べている。作文の児童は「４A リレー」の学習において，リレーという運動文化や仲間と質の高い対話を行うことができたのだといえよう。この作文のように，体育の学習を通して「発見」したことについて語れる子どもを育てたい。

体育科では，昨年度から「わかる」「できる」「かかわる」の三つの視点から体育の「学び」について考えてきた。新たな指導要領改訂に伴い，「体力づくり」のみを強調して受け止める動きも見られるが，体育授業のねらいを「体力づくり」や「できる」ことに限定してとらえるのは間違いである。新たな指導要領においてもその内容は「技能」「態度」「思考・判断」で構成され，知的学習（知育）や規範的学習（徳育）も重視されている[1]。「知」「徳」「体」を切り離してとらえるのではなく，三者のバランスがとれた教科としての体育科の学びを提唱したい。

運動の技術やスポーツのルールについて「わかる」ことが，「できること・上手くなること」に結びつく。作文にもあるように，自分の動きを見たり友だちに教えてもらったりして，コツについてわかったり，タイムをもとにオーダーを考えたりすることが記録の向上につながっていく。このように「できる」「上手くなる」ための筋道についての理解を通して技能をも向上させたい。

その過程は個別な営みではなく，子どもどうしあるいは子どもと教師が「やりとりを通して」展開していくことが不可欠である。子どもたちが，自主性を発揮して自律や自治の能力を高めたり，人とのかかわり方や道徳性を身につけたりするためには，社会への参加は非常に重要である。４A リレーのように，自分たちの直面する問題からルールの必要性を感じ，「みんながすなおに守れるルール」を取り決めていくことや，仲間と教えあって上手くなっていくことも，「学び」としての体育には不可欠だといえよう。

本校の子どもたちは知的な好奇心に満ちあふれていて，未知のできごととの出会いに対して積極的な児童が多い。一方多様な運動経験の機会は不足しているといわざるをえない。未知の運動のおもしろさに出会わせたり，知っているスポーツに対して再認識させたりするような学びを保

障していくことが，本校の子どもたちにあった体育授業となるだろう。加えて，先述のような「人とのやりとり」を通して学ぶ過程において，これまでの自分がもっていたものの見方がかわったり，仲間に対する見方がかわったりする経験も，「新たな発見」といえるだろう。

(2) 体育科学習における「学びの質の高まり」

「未知の運動のおもしろさに出会う経験」「知っているスポーツについて学び直す経験」「自分や仲間の可能性について再認識する経験」などは，いずれも自分の「かわる可能性」を発見することだといえよう。学校提案における「認識の更新」という主張にあたる。私たち教師は，そのような子どもが「かわる可能性」に働きかけるために，学習計画を構想し，授業技術を磨き，子どもと対話し理解しようとする。「子どもを変えよう」とするのではなく，子ども自身の「かわりたい」という願いに応えられるよう働きかけるのである。

教科学習は，単に教科に固有の知識や技能の習得を最終目的とするものではない。「教科の系統的な学習を通して，生活をめぐる諸現象の中にあるものごとの関係性を把握し，つまり自然，社会という対象の論理を学習し，それに基づいて正しい判断ができる力を獲得させることを目標としている。」と市川がいうように[2]，学習した内容が，人格形成にまで及ぶことを視野におくべきであろう。

子どもが運動やスポーツに対する見方をかえ，他者に対する見方をかえ，自身に対する見方をかえていく「学び」によって，正しい判断の能力を高めていくことができる。「学びの質の高まり」の最終段階は，そのような「ものの見方がかわる」ことであり，そのために必要な日々の学習においては，小学校段階では「運動の技術についてわかること」「基本的な技能を身につけること」「ルールを理解したり自分たちでつくったりすること」「自分たちで競技会や発表会を運営できること」などが位置づけられるだろう。もちろんどれか一つだけの達成では不十分で，発達段階によって軽重はあるものの，「できる」「わかる」「かかわる」の三者がそれなりに充実することが重要である。そういった「学び」を通して，「自分に対し容易に見切りをつけない子ども」「スポーツが上手くなるための知識や技能をもった子ども」「仲間とともに高まるための方法を理解している子ども」「スポーツの歴史やルールについて興味をもつ子ども」そして「勝敗や結果だけで友だちやスポーツを判断しない子ども」を育んでいけると考えている。

2．研究の展望

昨年度同様，先行実践や先行研究から学ぶことを大切にしたい。私たちが日ごろ何気なく行っている授業実践は，どれも誰か先人によって発想され実践されたものである。またすぐれた実践の内容や方法には，研究者によって明らかにされた知見が反映されている。「学び」を追求するのであるから，教師自身が「よき学び手」となることを目指すべきである。

本年度は，部員がそれぞれ個人テーマを掲げ，その追究を行っていく。「低学年期の児童の運動感覚を発達させる教材の系統」「子どもの発達を支援し子どもどうしのつながりを深めるための授業の要因」について，大学の研究者と協同で探っていきたい。

3．研究と課題の把握の手立て

授業を通して子どもたちがどのようなことをわかりできるようになったかを，感想文やビデオ映像などをもとに分析する。助言者や学生との「授業観察－事後協議」などをもとに，授業づくりが子どもの発見や変容を促すことに結びついていたかどうかを検証したいと考えている。

昨年度研究の一環として，学校年間カリキュラムを作成することができた。年度当初からカリキュラムにもとづく授業を全学年でスタートすることができた。カリキュラムの効果などについても，検証していきたい。

[参考文献]

1) 高橋健夫(2008)「教育改革でこれまでの体育はこう変わらねばならない」，『体育科教育』，5月号，pp14－18

2) 市川純夫(2006)「学校教育の存在と教科の意味　―学校教育を支える論理の再確認―」，和歌山大学教育学部教育実践総合センター紀要　No.16